

## 教育目標

【自分づくり】社会に目を開き 「なりたい自分」の姿を描き 実現しようとする人

- 自ら考え、表現できる人（創造）
- 仲間とともに高め合える人（共生）
- 心身ともにたくましい人（健康）

学校だより 第11号

ひ ら く

平成28年 7月13日発行  
須賀川市立第三中学校  
TEL 73-2377  
発行責任者：校長 高崎則行

## 本校校歌の作曲者のお孫さんの慰問演奏会が実現 「夢を描いて勇気を持って進んでほしい」のメッセージ



7月6日（水）、在英福島県人会と福島民報新聞社のご仲介により、イギリスロンドンを拠点にヨーロッパをはじめ世界各国で活躍しているピアニスト・作曲家の平井元喜（ひらい・もとき）氏による慰問（いもん）演奏会が、東日本大震災からの復興支援の一環として本校体育館で開催されました。

本校校歌を作曲したのは、須賀川市歌や童謡「とんぼのめがね」、文部省唱歌「スキー」も手がけた祖父の康三郎（こうざぶろう）氏。そのご縁で、須賀川市での演奏会に本校を選んでくださいました。

演奏会では、モーツァルトやショパンの曲のほか、元喜氏が東日本大震災の被災地を思っ作曲した「祈り、そして希望」が披露（ひろう）され、さらには、須賀川市歌、本校校歌、「とんぼのめがね」を全校生が元喜氏の伴奏で歌って、交流を深めました。世界の一流、「本物との出会い」を経験できて、生徒には生涯（しょうがい）忘れることのない思い出になったことと思います。

また、元喜氏にはトークの中で貴重なメッセージも頂戴（ちやうだい）しました。

- 学校の教科、すべてがよくできなくても夢はかなうのです。
- 将来なりたいものを心に描いたら、行動を起こすことが大事なのです。
- 近いところに3つくらい中位の夢を描いて、ちょっとずつ達成していきましょう。
- それが自信になって、大きな夢に近づいていけるのです。

これらのアドバイスは、元喜氏自身の体験に基づくものなのでしょう。ご自分がそのようにして現在の自分を築き上げ、そして未来を築いていかれるのだらうと考えます。だから、このアドバイスも自分の夢を本当に実現した「本物の人物からの本物のアドバイス」なのです。また、元喜氏は、演奏会を「皆さんは、我々大人の希望です。夢を描いて、勇気をもって進んでください。発展を祈っています。いつも応援しています。」というメッセージで締（し）めくくりました。淡々と話されましたが、生徒の心の壁（ひだ）の奥まで染（し）み入ってほしいと願いながらお聞きしました。

お帰りの際、元喜氏は「三中の生徒さんと一緒に歌を歌うことができ感激しました。」と私におっしゃいました。私にとっては何よりもうれしい言葉となりました。



## 今年の菊づくりは断念 「校長先生、来年度はやりましょう」

本紙でも第7号ほか、何回かお知らせしました菊づくりは、お手伝いいただける方がいなかったことと苗を植える時期を逃したため、本年度の実施は断念しました。今、2年生は、技術科でプランターでの野菜作りをしています。技術室前で水やりをしている生徒男女数名が朝と昼休みを利用してやってみたくて言ってくれたのですが、このことを伝えると非常に残念がり、「校長先生、来年度はやりましょう。」と励ましてくれました。

## 心の痛みと命の大切さを学ぶ



6月27日（月）、福島県警・犯罪被害支援室の三本（みもと）ミチさんらをお招きして、全学年の生徒を対象に「命の大切さを学ぶ授業」を実施しました。

犯罪被害者の、深く生々しい心の痛みを感じ取り、自分の命も他人の命も等しく慈（いっく）しまなければならないということを感じ得たようです。

生徒を代表して生徒会長の小林杏優（あゆ）さんがお礼の言葉を述べ、被害者本人だけでなく家族・友人らにまで広がる悲しみについて思いを馳（は）せました。

## 各種表彰の記録

歯と口の健康週間コンクール（よい歯の表彰）

◇歯の優良生徒表彰

小 塩 護（まもる）③

齋藤 好花（すみか）③

金谷 大智（たいち）③

齋藤 一心（かずむね）③



◇ポスターの部 入選

鈴木 菜月③ 関根まりあ③

永嶋 綾花（あやか）② 柏倉 嘉乃（よしの）①

◇書写の部 入選

寺島 綾咲（あやさ）②

◇作文の部 入選

寺山 真由③ 込山 詩乃（しの）③

関根加奈恵（かなえ）③

◇標語の部

特選 吉 田 葵（あおい）①

入選 猪 狩 颯（そう）①

第9回サンフラワーカップ

近県中学校バスケットボール大会

女子団体 第3位

## その3 金銭についての教育（家庭教育文献紹介「親でなければならない教育」より）

「金銭教育」というと、一般には「こづかい」のしつけととらえがちですが、家族がどのように収入を得て、どのように切り盛りをしているかということを考えさせたいものです。このような教育をすることで、労働と生活に関する考え方も正しく育つのではないのでしょうか。

また、「自分が大学生を送れるのは、親が仕送りをしてくれるからだ。」という考えは、大学生としてはあまりに単純で自己中心的な金銭観だと考えなくてはなりません。大学教育は、国立であれ、私立であれ、その大部分を税金で賄（まかな）っているのです。国民がどれだけの負担を担（にな）い、同年齢の勤労青少年もそのかなりの部分を担っていることを考えさせなければ、社会の一員としての自覚や社会貢献の意識も希薄（きはく）になってしまうことでしょう。

一つの目安としては、小学校に入ったら、誰が働いて一家の生計が成り立っているのかを教え、小学校中学年以上になったら、家計のプランや切り盛りも話してあげ、中学生以上なら、親の退職後の計画や見通しも話し合っておくとよいでしょう。それぞれの家庭で、収入も異なれば、家族構成やライフプランによって支出も異なります。友達とおこづかいの額が同じでなくても納得し、お金を大事に使うようになるのは、このような家庭教育の成果です。

両親が一致（いっし）協力して「収入の額によって人間の価値は決まらないこと」「働いて報酬（金）を得ることは生易（なまやさ）しいことではないこと」「金に換（か）えられない大切なものがあること」「自分の仕事に見合った報酬を求めるには、人はどうあらねばならないか」を体験を通して教えることが、子どもが社会に目を開き、自分らしい生き方を考えるうえで極めて大切なことなのでしょう。

かつて私は、高校受験の際には、家には月々どのくらいの収入があつて、家賃や食費、光熱費などを差し引いて、やりくりできるお金がどのくらいになり、そのうちのどのくらいを高校生である自分が使うことになるのかを考えさせるよう、お勧めしてきました。皆さんも、どうですか？

